

明治期における青年教育論の全体像とその変容

佐竹 智子

(2012年10月2日受理)

The Overall Picture of and Change in Education of Youth in the Meiji Period

Tomoko Satake

Abstract: This article aims to analyze books on 'Youth' published in the Meiji period, grasps the overall picture of education of youth in the Meiji period and clarify the characteristics. The article focuses on the following four findings. First, the publication of books on 'Youth' was affected by social backgrounds in the Meiji period. In the early 1890s, for example, a large number of publications were issued around the time of promulgation of the Meiji Constitution and the first convening of the Imperial Diet. After the Russo-Japanese War, many books on Youth Groups (Seinendan) were published as the groups drew attention as key to restore shattered rural areas. Second, as a general tendency, the number of books intended for students was greater than that of any books on youth. It is after 1906 that books focusing on 'Youth' in rural areas started to be published. Third, an analysis on the contents has revealed that a large number of books on self-discipline, economic success, hygienics, and self-supporting learning and self-education were published. Fourth, a few books on 'Youth' published in the Meiji period explained the responsibility of youth in the new era, but there were little discussion on how they should be specifically educated.

Key words: Meiji period, education of youth, student, 'youth' in rural areas

キーワード：明治期，青年教育，学生，地方青年

はじめに

これまで、筆者は、青年団の結成過程において重要な役割を果たした山本瀧之助の青年教育論の構想とその具体化の過程に主眼をおき研究してきた。とはいえ、いまだ多くの課題が残されている。そのひとつに明治期の「青年」をめぐる言説のなかで、山本瀧之助の主張がどのような意味で、同時代において注目に値する独自性を有していたかという検討が未だ不十分である点が挙げられる。

そうしたとき、そもそも明治期の「青年」をめぐる言説とはどのような構造をもっていたのかを明らかにすることが、課題となってくる。

したがって、本稿では、明治期に出版された「青年」に関連する書籍全般を分析対象とし、明治期における

青年教育論の全体像を把握するとともに、その変遷を追っていくことを通じて、その傾向と特徴を明らかにしていくことを目的とする。

ちなみに、先行研究を概観してみても、明治期における「青年」に関連する書籍を網羅し分析したものは、見当たらない。その意味において、明治期における青年期教育研究の基礎的研究としても本研究の意義はきわめて大きい。

なお、本稿で使用する史料は、現在、国会国立図書館による近代デジタルライブラリーで公開されている図書である。「青年」というキーワードを入れて検索した結果、明治期における「青年」に関連する書籍は、455冊存在することが明らかとなった¹⁾。ただし、本稿では、この期に多く発刊された青年雑誌及び小説等の文学作品は除く。先に示した数は、それらを除いた

数である。

それらの書籍を分析するにあたって、内容別、対象別の分類を行った。まず、内容については、明治期に出版をみた「青年」に関連する書籍を、小川利夫、寺崎昌男監修『近代日本青年期教育叢書』²⁾で示された①青年期教育論、②青年学校論、③青少年団・青年組織論、④苦学・独学論、⑤進学案内、⑥職業案内・職業指導という青年教育論に関する6つの枠組みを参照しつつ、独自に新たな項目を設け、詳細に分類した。それをまとめたものが、表1である。

つづいて、対象については、各書籍の本文中に、著者が明確に想定する読者を示しているもの(複数の読者にまたがっているものも含む)を分析対象とした。対象別の書籍出版の推移をまとめたものが、図3である。

さらに、表2は、主要な内容と対象を取り上げ、クロス集計したものである。以下、これらの表や図を参照しつつ、詳細に論証していく。

1. 「青年」に関連する書籍出版の推移

そもそも「青年」という用語は、明治10年代末から20年代のはじめにかけて、人口に膾炙しはじめた。それにともない、「青年」を対象とした書籍や「青年」を教育する者を対象と書籍が相次いで出版されてくる。近代デジタルライブラリーで検索した「青年」に関連する書籍、455冊の出版の推移を年代別に整理すると、図1のようになる。

(1) 1880年代の書籍出版の推移

1880年、初の「青年」に関する書籍が出版される。早稲田大学の前身である東京専門学校の講義録『応用心理学』³⁾である。同書は、講義録とはいえ、その頁数は122頁にのぼり、「教育的心理学とは如何なる科学か」⁴⁾という課題を掲げ、児童期から青年期にわたる心理的発達とそれに即した教育方法が著されている。やがて、教育者となるものに向けた講義録は、既に教

壇にたっている教師の指南書としても活用されたことであろう。

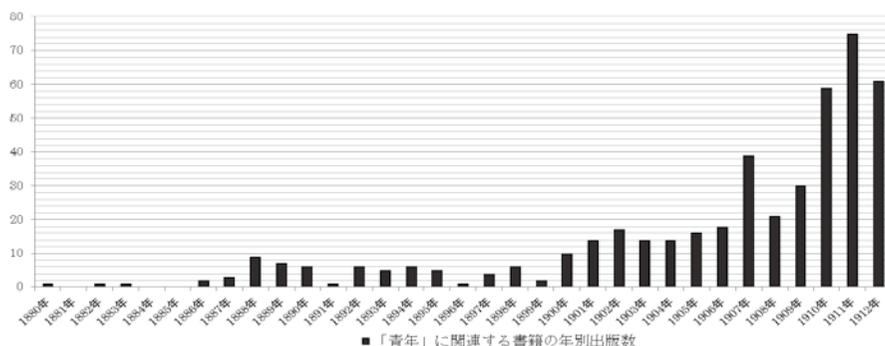
その後、1886年までは、『民権官権政党盟約全書』⁵⁾と『卒業青年士官訓戒』⁶⁾の2冊のみの出版にとどまり、目立った変化はみられない。1880年代の出版数の動向は、全体的にみれば、緩慢である。そのなかでも、一度目のピークを迎えるのが、1887年から1890年である。

日本における初の【青年期教育論】と目される徳富蘇峰の『新日本之青年』⁷⁾が出版されたのも、この時期にあたる。これは、彼が経営していた大江義塾の塾生に向けて行った演説内容を編集し、一冊にまとめたものである。その内容は、「彼ノ青年ナルモノハ社会ノ継続者ナリ」⁸⁾、「青年ハ進歩ノ朋友ナル」⁹⁾などの言葉を駆使し、新時代における青年の責務の重要性を繰り返し論じ、青年の奮起を促すものであった。

同書は、未来を担う次世代としての「青年」を前面に押し出し、その「青年」を教導する「教育」の役割の重大さを訴えることを中心的なテーマに据えている。そして、「明治ノ世界」は、「明治ノ青年」によって創造されるものでなくてはならないと彼は主張する¹⁰⁾。同時期に出版された書籍にも「新日本」という言葉が多用されるとともに、「新日本」を支える「青年」の役割の大きさが強調されている¹¹⁾。

この背景には、1888年の郡区町村編成法の公布や1889年の大日本帝国憲法の発布、1890年の第一回衆議院議員総選挙の実施、第一回帝国議会の開催など大きな国勢の動きがあった。また、1890年には、明治期における修身・道徳の根本規範とされた「教育勅語」が渙発され、国民の教育への関心が高まりを見せ始めた時期でもある。

ただし、大きな国政の動きだけが、「青年」をめぐる言説を生み出したわけではない。明治7、8年からの自由民権運動の志士たちを「壮士」と表現し、政治上の「不平、擾乱、失望、怨根」がすべて集約された「天保の老人」であるとの持論を展開した徳富の言説



＜図1：明治期における「青年」に関連する書籍出版の推移＞

は、あまりにも有名である。彼は、この軽蔑的な言葉をその反意語である「青年」と組み合わせることによって世代を大きく二分して見せたのである¹²⁾。また、「青年」の形成には、「教育」の役割が大きいという徳富の論調は、政治的運動によって立身出世を果たした「壮士」とは異なる、学問による立身出世という新たな風潮を生みだした。こうした言論が、青年たちに受容され、当時の時代的背景とあいまって浸透していったのである。

(2) 1900年から明治末期までの書籍出版の推移

つづいて、1900年代の動向をみると、ほぼ右肩上がり、「青年」に関連する書籍が出版されたことがわかる。ただ、図1を見てわかるとおり、1910年以降の増加は著しい。その増加の要因は、表1に示したように、「青年団」に関連する報告書が、相次いで出版され始めたことによる。

まず、【地方青年団体活動報告書】¹³⁾が1908年から1912までの5年間に37冊出版されている。これらは、行政が作成したものとは異なり、各青年団体が独自に作成したものである。団員に向けて発行された規約集や会員名簿、各種行事（農事品評会、集会等）の記録などその内容は様々である。これらの活動報告書は、1908年以前にも出版されてはいるが、図2¹⁴⁾に示した通り、1908年以降の「青年団」の設立数の大幅な増加と比例する形で、その出版数も増加したと考えられる。

また、【行政による地方青年団体の調査報告書】は、1910年の『地方経営小鑑』¹⁵⁾を嚆矢とし、1912年までの3年間に31冊出版された。これらの報告書は、主に内務省、文部省、地方自治体の学事課等が、全国に存在した無数の青年団体の実態を把握するために調査したものである。調査範囲が狭くなればなるほど、その内容は、詳細なものとなり、各青年団体の規約や沿革、活動内容、団員数の増減にまでおよぶ。

さらに、文部省は、1910年3月、補習教育の施設経営優良を理由に82の青年団体に対し表彰を行った。それにひきつづき、翌1911年5月、54の優良青年団体を表彰している。こうして文部省によって選出された優良青年団

の活動実践は、『地方自治青年団体模範事績』¹⁶⁾、『模範青年団の組織及び設備』¹⁷⁾に収められ、青年団経営の参考書という意味をもって出版されるに至った。

こうした背景には、1905年に終結した日露戦争後の地方改良運動が大きく関係している。朝鮮、満州の独占的支配をめぐる戦われた日露戦争で、日本は総力を投入した。動員兵109万人、死傷者12万人、戦費17億円という数字がそれを示している¹⁸⁾。

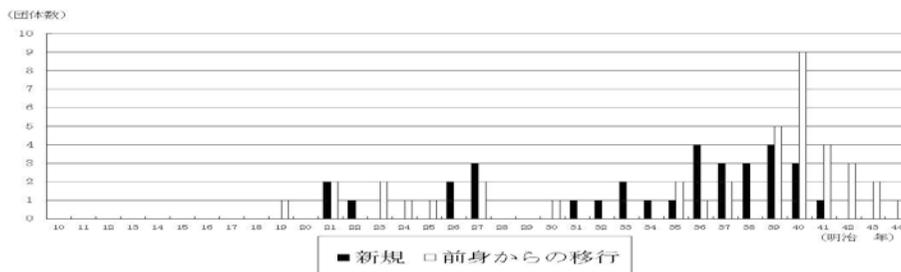
その結果、たしかに、帝国主義国として列強と並ぶ国際的地位を得たが、国内にあって、地方は、疲弊、荒廃し、財政も破綻に瀕していた¹⁹⁾。自らの体制基盤を根底からゆるがしかねない危機的な状況に直面しながらも、明治国家は依然として、軍備拡張政策を続行するとともに、累積した公債の償還を軸とする財政政策と産業基盤の育成が進められた。

地方改良運動は、そうした緊急事態への対応策であった²⁰⁾。そこでは、国家の基礎としての地方自治体を、帝国主義国家としての日本を支えるに足るものとするのが強く求められた²¹⁾。「青年団」は、地方改良運動が推進されるにつれ、注目を浴びようになる。すなわち、全国各地に自発的に展開されていた青年団活動は、地方改良運動が展開するなかで、明治政府が標榜する「地方自治」の担い手として位置づけられることとなったのである。

図1と図2を比較してわかるように、明治期における「青年」に関する書籍の出版数の推移は、ほぼ「青年団」の設立の時期と重なる。このように、明治期における「青年」に関する書籍の出版は、社会の趨勢と深いつながりをもって推移してきたのである。

2. 「学生」を対象とした青年教育論の変遷

1880年代後半から徳富蘇峰を中心とする論客たちがこぞって「新日本」における「青年」の責務の重要性を繰り返し論じてきたことは、前節で明らかにした通りである。ただし、この期の「青年」という用語は、主に



<図2：「青年団」の設立時期>

＜表1：明治期における「青年」に関する書籍の内容別分類とその推移＞

	1880年	1881年	1882年	1883年	1884年	1885年	1886年	1887年	1888年	1889年	1890年	1891年	1892年	1893年	1894年	1895年	1896年	1897年	1898年	1899年	1900年	1901年	1902年	1903年	1904年	1905年	1906年	1907年	1908年	1909年	1910年	1911年	1912年	内 容 別 出 版 数 合 計		
精神修養論																																				
地方青年団体活動報告								1	1	1	1	1	2	3		1																				95
経済的改良論																																				41
行政による青年団体実 態調査								1																											33	
医学・衛生論							2																													31
健康・衛生(ミナマルへ ルム・性教育含む)																																			23	
一般常識の涵養・礼儀 作法											2																								19	
地方青年教育の充実策 弁論・討論・演説法										2																									19	
進学・留学案内										1					2																				18	
実業論・経営論																																			17	
政治学																																			16	
発達心理学								2	3	1																									13	
家庭教育																																			10	
作文法 (英作文法含む)																																			8	
個人教育									1																										7	
青年組織論																																			6	
教授法																																			4	
青年師範の養成																																			4	
青年期教育論																																			3	
女子への教育年會/ 弘教青年会活動報告																																			2	
職業案内																																			2	
その他								2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3																	50	
年別出版数合計	1	0	1	1	0	0	2	3	9	7	6	1	6	5	6	5	1	4	6	2	10	14	17	14	14	14	16	18	39	21	30	59	76	61	455	

「学生・書生」を指すものとして使われていた。地方の青年たちが注目され始めるのは、日露戦後のことである。そこで、まず、本節では、「学生」²²⁾を対象とした青年教育論に着目したい。

(1) 青年期教育論

【青年期教育論】とは、①「青年」の定義、②青年期における課題、③独自の教育論を明確に示しているものと定義した。こうした観点から分類した際、明治期における「学生」を対象とした【青年期教育論】は、先述した徳富蘇峰の『新日本之青年』²³⁾と新渡戸稲造の『修養』²⁴⁾の2冊に絞られる。前者については、すでに前節で詳述したので、後者の『修養』について考察していく。

新渡戸は、1897年に創刊された雑誌『実業之日本』に毎月2回寄稿しており、その数は「百に垂らん」²⁵⁾と序文で述べている。それらを増補し、一冊の書籍にまとめたものが『修養』である。その構成は、「第一章 青年の特性」にはじまり、「第二章 青年の立志」、「第三章 職業選択」とつづき、全17章からなる。その頁数も622頁という大著である。

彼のいう「青年」の特性とは、大きく3点ある。ひとつに、「希望抱負に富める者」²⁶⁾、ふたつめに「シンプル(淡泊)であること」²⁷⁾、最後に「元氣(エネルギー)に富むこと」²⁸⁾である。ふたつめの「シンプル(淡泊)であること」は、すなわち、素直な心を持つことである。そうした特性を持った者こそ「青年」であると説く。そして、体験談を交えながら、学生が進路を選択する際の心得や学習法、読書法を論じる。また、何よりの敵は自分の心にあると説き、人としての「道」とはなんたるものかという人生訓などを披歴している。大著でありながら、それを感じさせない巧妙な語り口は、読者を引きつけるものがある。1913年に増版されたもの納得できる。

新渡戸の論調は、蘇峰のように、「青年」を鼓舞するようなものではない。むしろ、冷静に自分の長所短所と向き合い、自分自身の特性に合った進路選択を行うことを説く。時代背景の違いはもとより、ジャーナリストと教育者というバックボーンの違いが看取できる。

(2) 精神修養論

明治期における「青年」に関連する書籍のなかで、最も多く出版されたのは、【精神修養論】で94冊ある。ここでは、品性を磨き、自己の人格を高めることを中心に著されたものを【精神修養論】とした。そのなかで、「学生」を対象とした【精神修養論】について、詳細にみていくと、概して2種のパターンからなることが明らかとなった。

第一に、なんらかの宗教的背景を持つ【精神修養論】である。たとえば、キリスト教(6冊)や仏教(5冊)、儒教(1冊)などがあるが、少数に限られている。

第二に、「新日本」における「青年」の責務の重要性を

説き、人格の向上を求めるものである。これらは、著者の「青年」に対する個人的な願望が強く反映されているものが多い。そのなかでも、注目に値するのは、明治期のジャーナリスト鈴木力が著わした『活青年』²⁹⁾である。1891年に初版が刊行されたのち、1893年に増版されている。「自序」で、彼は次のようにいう。「青年ハ須らく青年らしかるべし。能く青年の本領を執り青年の地歩を持、青年の特性を達し。以て大日本の青年たる天授の特性を取了する者。是れ活青年と謂ふ。」³⁰⁾。さらに、本文中で次のように述べている。「現今青年の責任は特に重大非常にして、東西古今の知識を融解し、鑄陶し、一国の新文明を鍛成して五大州生民の上に沢を施くに在り」³¹⁾、「青年の本分は一挙一動皆青年の特性を失はざるに在り。一進一退咸な真面目を貫くに在り」³²⁾と主張する。彼は、青年の責務の重要性を「五大州生民の上」に立つ者という言葉で表し、古今東西の知識を熟知、会得し、青年の本領である「真面目」を発揮することを喚起する。

このように、1880年代から1990年代の初頭までの【精神修養論】の主流は、多くの知識を涵養し、それらの知識を善用するための前提として、優れた人格を有することの必要性を論じたものである。この期に「学生」を対象とした【精神修養論】が多く出版されたのは、そのためである。

(3) 健康・衛生学

「学生」を対象とした書籍を、内容別に分析すると、表2に示したように、最も多いのが、【健康・衛生学】である。『成効と体質』³³⁾をはじめとして、勉学に適する住環境、食生活、運動の必要性、睡眠についてなど学生の健康管理に関する知識が著されている。ひとり郷里を離れ、東京で生活する学生たちにとって「健康管理」は重要な課題のひとつであったことがわかる。

しかし、実態は健康管理以前の問題であった。徳富蘇峰は『国民之友』に「教育界の時事」という一文を寄稿し、学生の惰性ぶりと教師の学生に対する無関心な実態を次のように糾弾している。「生徒が如何なる放蕩怠情をなすも、教師は毫も之に関さざるなり。何となれば教師は、只生徒に向て学問を売る者なればなり」³⁴⁾と。実際、当時の学生の多くが奢侈に流れ、本分から逸脱していたことは、大きな問題になっていた。そのため、飲酒・喫煙の健康被害や性病被害とその予防、公娼の廃止などについて著されたものが11冊と、【健康・衛生学】ではもっとも多い³⁵⁾。このことは、当時の学生たちの風紀がいかに乱れ、墮落した生活を送っていたかということを実証している。

その一方、前途無き「煩悶青年」の増大が社会問題化していた。すでに、1890年代後半頃から、遊学学生の

<表2：明治期における「青年」書籍の対象と内容のクロス集計>

内容		精神修養論	苦学・独学論	青年期教育論	地方青年教育の充実策	青年組織論	実業論・経営論	経済的成功論	政治学	軍人教育	進学・留学案内	発達心理学	家庭教育	教授法	健康・衛生	弁論・討論・演説法	合計
対象	学生	22	15	2				4	6	1	1	1			23	5	80
	地方青年	6	2	1	15	5	4										33
	青年実業家						7	2			1						10
	軍人青年									7						6	13
	進学・留学希望者		2					1			16						19
	青年政治家								2								2
	婦女子	1												2			3
	教育者	5			16	7			1				8		4		41
	親				1								3	11	2		17

増加により、帝国大学の卒業生すら官吏の道を塞がれる事態が巻き起こっていた。その後も悪化の途をたどり、1911年の東京帝国大学生の卒業後の進路をみると、「職業未定又ハ不詳者」が法科大学で38.3%、文科大学で39.5%にまでのぼる惨憺たる状況であった³⁶⁾。悩み苦しんだ挙句に自殺する青年も多く、その救済策が模索されていた。精神病理学の観点から、「煩悶」に陥る原因をつきとめ、その予防策を研究したもののまで出版されている³⁷⁾。また『現代青年論』³⁸⁾では、「功利主義の奴隷」と化した学生の負担軽減の必要性を訴えるとともに、政府による「煩悶青年」に対する救済策の貧弱さを指摘する。それほどまでに、「煩悶青年」を巡る問題が深刻化していたといえる。

その他、【健康・衛生学】に関する書籍は、肺結核の予防に関する書籍が3冊、いかにして知能を高めるかという疑問に対して医学的な見地から著したものが3冊、幼年期から青年期に至るまでの一般的な健康法について著されたものが1冊ある。

(4) 苦学・独学論

むしろ、本来の学生の姿とはかけ離れた自堕落な生活を送っていた者が大多数いたにせよ、明治期における学生たちが、先行きのわからない厳しい状況下におかれていたことは、これまで論じてきたとおりである。

これらの学生たちのために著されたものが【苦学・独学論】である。【苦学・独学論】は『青年学術軌範』³⁹⁾に端を発し、毎年1～2冊のペースで規則的に出版をみる。その多くは、東京で勉学に励む「学生」に向けて著されたものであるが、地方に多数存在した「進学・留学希望者」にとっても必読書だったと考えられる。

苦学法⁴⁰⁾について、とりわけ詳細に著されているのが、『独立自活法：青年学生』⁴¹⁾である。著者は、「父母の資給なくして仰がずしてその宿志を遂げんもの、為に説く」⁴²⁾とし、「読者は寧ろ貧困にして有為なれ、寧ろ一人の依頼者なくして独立独歩なれ」⁴³⁾と苦学生を励ます。全110頁のうち60頁は、学業と両立できる職業の種類について論じられている。具体的な仕事内容や応募

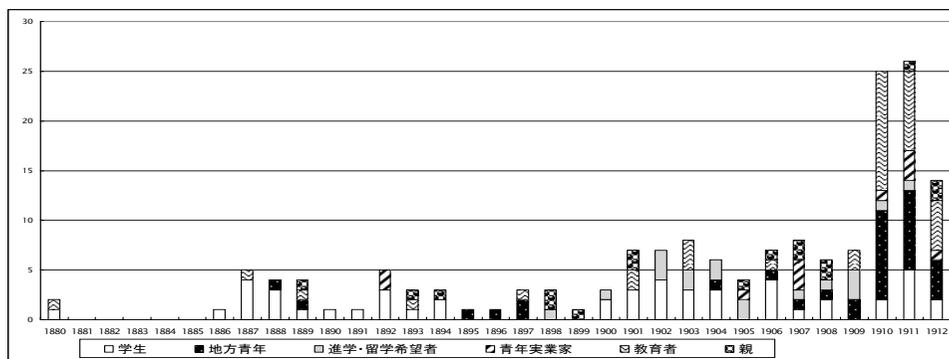
募方法まで記載されており、すぐにでも仕事を見つけられるように工夫してある。郵便配達員、新聞の売り子、諸官庁等の書記、貸本屋、巡查、教員などその職種も様々である。自活しながら勉学に励む多くの苦学生の手引書として大いに活用されたに違いない。

独学法⁴⁴⁾についてみれば、文部官僚であった澤柳政太郎の『学修法』⁴⁵⁾がひときわ目立つ。それというのも、1908年に初版が刊行され、その後2度に渡り増版されている。それだけに、読者も多かったことがわかる。彼はいう。「学修法の第一の原則は学生たる者は自発的奮励をなすべしと云ふにある」⁴⁶⁾と。このように、「学修」というものは、決して受動的なものであってはならないと主張する。そのうえで、どのように思考し、観察し、読書し知識を習得していくかについて論じている。このように、【苦学・独学論】は、実用書的なものが多い。それゆえ、当時の学生たちの愛読書として親しまれていたことだろう。

(5) 経済的成功論

【経済的成功論】については、いかにして富を得るかということについて著されたものに限定して分類した。これらは、その読者を限定しているものは少ない。とはいえ、今回の分析では「学生」を対象とするものが最も多いという結果となった。これまで論じてきたように、苦渋に満ちた生活だけでは、青年たちも耐えられない。その先にある希望を示したものが、【経済的成功論】だったのである。

たとえば、『向上的青年』⁴⁷⁾では、「既に青年は修養を以て任務のなすとすれば、如何にして修養の実を挙げ得るかは、大に勘考を要する事と存じ候。本書は実に斯の要求を満たすものに有。」⁴⁸⁾とあり、学習した成果をいかに挙げるかということについて論じられている。その内容は、むやみに報酬主義を批判する精神修養論者を糾弾し、正しく働き報酬を得ることこそが、成功への近道であると主張するものである。投機は賭博とは異なり、正業であると断言し、株式売買法などを論じている。他の【経済的成功論】も同様の内容のものが多いが、なかには、カーネギーやロックフェラー



＜図3：明治期における「青年」に関連する書籍出版の対象別推移＞

など海外の成功者を例に取り上げ、成功者から学ぶべきものを論じているものもある⁴⁹⁾。

(6) 進学・留学案内

最後に、将来の「学生」である「進学・留学希望者」を対象に著された【進学・留学案内】の変遷を追う。学問による立身出世という新しい時流にのって、初の【進学・留学案内】が出版をみるのは、1895年のことである⁵⁰⁾。その後、数年に亘り新たに出版されることはないが、1902年以降、毎年1～3冊出版されるようになる。計16冊のうち、11冊が主に東京への【進学案内】、のこりの5冊が【留学案内】である。

【進学案内】は、上京に際しての心得、官立公立私立各種学校⁵¹⁾の紹介（規則・学費・入学方法など）、入試問題とその対策法が主な内容である。

他方、【留学案内】は、1902年の『青年の渡米』⁵²⁾を嚆矢とし、断続的に出版されるようになる。その内容は、留学者の体験談を中心に、旅券の発行方法、渡米者の服装、アメリカの生活様式、学校紹介、求職方法、労働環境・賃金についてなど留学に必要な多くの情報が記載されている。『海外苦学案内』⁵³⁾にのみ、ドイツ、カナダへの留学情報が掲載されているが、その他はすべてアメリカへの留学情報である。明治期における青年の留学先が主にアメリカであったことが窺える。また、先述したような国内における前途多難な状況が、留学という新たな活路を青年たちに提供するきっかけになったとも考えられる。

3. 「地方青年」を対象とした青年教育論の変遷

図3をみると、「地方青年」を対象とした書籍は、1909年から1912年の4年間に集中して出版されたことがわかる。ちなみに、図3の統計には、第一節で言及した「地方青年団体」に関する報告書は含まれていない。本節では、「地方青年」を対象とした青年教育論について考察し

ていく。

(1) 青年期教育論

「学生・書生」の代名詞として「青年」という言葉が使用された時代に、一冊の地方の若者たちを対象とした【青年期教育論】が出版される。それが、山本瀧之助の『田舎青年』⁵⁴⁾である。彼は、土着の若者とも都会に学ぶ学生・書生とも異なる「田舎青年」という新たな概念を創出した。同書では、田舎の若者たちが、田舎の旧弊を黙認し、現状に安住している現実に苦言を呈するところから始まる。つづいて、そうした田舎の若者たちを「田舎青年」へと育てあげるための教育論を展開する。まず、田舎の若者たちに対して、田舎の旧弊から決別すること、また、青年日記を綴ることを提唱する。青年日記とは、自らの目標、会得した知識や思想を書きとめることにより、自らを振り返る為のものである。彼は、青年日記を「自己を戒めるための教科書」として位置づける。他者からの指導を待つのではなく、自らの力で自分自身を向上させる力を、彼は育成しようとしたのである⁵⁵⁾。このように、彼の説く教育論は、田舎の若者たちの意識を変革し、国家を支える存在としての「田舎青年」たる自覚を涵養しようとするものであった。

同書は、「地方青年」に向けた日本初の【青年期教育論】であったということだけでなく、「学生」という限定された範囲でのみ使われていた「青年」という概念を、田舎の若者たちにまで拡大した意味において大きな意義を持つ。しかしながら、こうした瀧之助の論調に対して、当時の世間の反応は想像以上に薄かった。唯一、新聞『日本』において好意的な評論を受けただけであった⁵⁶⁾。

(2) 精神修養論

「地方青年」⁵⁷⁾を対象とした【精神修養論】は、すべて報徳思想を背景にしたものである。『二宮尊徳翁と現代社会』⁵⁸⁾を嚆矢とし、その数は4冊と少ない。とはいえ、報徳思想を背景とした【精神修養論】が刊行された

いうことの意味は大きい。

そもそも、報徳思想とは、江戸時代末期に二宮尊徳によって形成されたものである⁵⁹⁾。尊徳が独学で学んだ神道・仏教・儒教などと、農業の経験から編み出した豊かに生きるための知恵である。「経済と道徳の融和」を訴え、私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元されると説く⁶⁰⁾。

この報徳思想を、地方改良運動の思想的根拠として位置づけるとともに、その普及をしていくために明治1905年に設立されたのが「報徳会」⁶¹⁾である。同会は、内務・文部・農商務省官僚を中心に組織され、日露戦争後の国家財政の窮迫と地方負担の増大による農村の動揺を鎮め、良町村を作り出すことをねらいとした⁶²⁾。

ちなみに、近代デジタルブライリーにおいて「報徳」というキーワードを入れて検索した結果、1909年から1912年までの4年間に108冊もの書籍が刊行されていることが確認できた。このように多くの報徳思想に関する書籍が出版されたのは、地方改良運動における国民の精神的基盤として根付かせようとした政府の意図が反映されたものであったとみてよい。

(3) 地方青年教育の充実策

【地方青年教育の充実策】とは、地方における青年教育全般の環境整備について論じられたものである。

表1に示したとおり、「教育勅語」が渙発された1890年前後に3冊、次に、1904年以降にその出版数をのばし、合計16冊が出版されている。

1890年前後の出版された3冊の内、2冊は、大分県⁶³⁾と鳥根県石見地方⁶⁴⁾という限られた範囲の青年を対象としたものであり、具体的な教育策が論じられたというよりも、青年の奮起を促すに留まった内容である。他方、『経済教育：実地経験』⁶⁵⁾は、地方の学校経営の不備を指摘するとともに、それを補うための青年夜学会の開催が急務⁶⁶⁾であると主張する。

つづいて、1904年以降に出版されたものをみると、将来の町村を支えていく「町村民」をいかにして育成していくかということを到達目標に掲げ、青年教育について論じられたものが主流である。そのなかでも、とりわけ詳細に著されたものが、大阪府天王寺師範学校校長であった村田一郎の『学校中心自治民育要義』⁶⁷⁾である。村田は、同書の執筆に際して、瀧之助を訪ねている⁶⁸⁾。そして、瀧之助の『地方青年団体』⁶⁹⁾をベースに青年団体と小学教育の関係を考えた旨を同書に著している⁷⁰⁾。ただし、瀧之助が「青年団」を中心とした地方の教育体制を構築しようとした考え方とは異なり、村田は、あくまで小学校教育を中心とした「庶民教育系統の建設」を企図している。彼は、小学校教育の次に青年団教育、それに次ぐ自治体教育によって、「国

家の臣民として忠実に其責務を尽すような人間」を育成することを構想した⁷¹⁾。

また、内務省地方局員であった前田宇治郎の『地方青年の手引き』⁷²⁾も特筆すべき一冊である。たとえば、青年団が公共事業を自発的に行うことを唱導するなど、彼の立場上、内務省の青年団政策と合致した内容が多々見られる。とはいえ、当時の地方青年の実態を明確に把握し、彼らをいかに善道するかについて著されたものとしては、評価すべき点も多い。特に彼が着目したのは青年指導者の責務の重大さである。彼は、青年指導者が往々にして、自らの名誉や野心を満たさんがためにその任にあたっている現状を批判する。そして、青年指導者の在るべき姿を次のように論じている。「広く知識を集め、能く世態を察し、更に進んで世界の大勢をも知る必要がある。」⁷³⁾と。

このように、【地方青年教育の充実策】は、「国家を支える臣民の育成」という命題のもとに論じられたものではあるが、その内容をみれば、真摯に青年と向き合い、彼らの教育の充実を図るための方策が詳細に論じられたものも多くみられた。

(4) 青年組織論

【青年組織論】は、地方青年団体の組織化の方法、その経営方法、青年団体における活動内容等について論じられているものと定義した。山本瀧之助の『地方青年団体』⁷⁴⁾を筆頭に、1910年に5冊、1911年に1冊の計6冊が出版をみる。

これら6冊の書籍はすべて「地方青年」だけを対象としたものではなく、特に地方の小学校長や篤志家など「地方の教育者」を対象に著されている。その内容をみると、一様に、青年団が運営する夜学会及び図書館の設置の必要性、青年団の規約の決め方やリーダーの選出方法、指導者の役割などについて論じられており、一見大きな違いは見られない。

ただし、それら6冊を「青年団」の目的という観点から分析すると、大きく2つに分けることができる。

第一に、「地方青年」の人格の形成、精神修養を目的とするものである。つまり、「青年団」を「教育の機関」として捉える立場である。山本瀧之助の『地方青年団体』、市川伝吉『自治と青年団体』⁷⁵⁾、篠原禄次『地方青年団体の組織及事業』⁷⁶⁾の3冊がこれにあたる。山本(広島県)と篠原(奈良県)は、小学教員で地元の「青年団」組織化に尽力した人物である。もとより、教育者という立場にあり、「青年団」を「教育の場」として位置づけていたことにも納得できる。ちなみに、市川は「町村自治研究会」という会の会員で、全国の「青年団」の調査にあたったことが著書のなかに記載しているが、詳細は不明である。

第二に、町村の発展、国運発展の基礎となることを「青年団」の目的とするものである。ここでは、「青年団」を「社会改良」の機関として捉え、産業の発展、町村の公共事業に従事することを強調している。まさに、地方改良運動の「担い手」として「青年団」を位置づけた国策を代弁するかのような論調が目立つ。

むしろ、教育の必要性についても論じているが、教育というよりも、むしろ「地方青年」の社会風紀の乱れを「矯正」することに主眼をおいたものである。遠藤隆吉、市川源三の『男女青年之心理及教育：附青年団体の指導』⁷⁷⁾、岡崎保吉の『模範的地方青年団之指針』⁷⁸⁾、河崎松葉の『地方青年団之指導』⁷⁹⁾、の3冊がこれにあたる。ちなみに、遠藤は、文学博士、市川は、東京府立第一高等女学校の校長を歴任し、女子教育の先駆者と呼ばれる人物である。また、岡崎と河崎は共にジャーナリストである。これらの人物のなかに、実際に「青年団」活動に関わっている者はいない。

おわりに

本稿では、明治期に出版された「青年」に関連する書籍全般を分析対象とし、明治期における青年教育論の全体像を把握するとともに、その変遷を追うことを通じてその傾向と特徴を明らかにすることを試みた。

その結果、明らかになったことは、次の5点である。

第一に、明治期における「青年」に関連する書籍は、「新日本」の「青年」の責務について説かれているものが多くみられる反面、具体的に青年が抱える課題を分析したうえで、どのように「教育」していくかということについての議論が乏しいという点である。実際、分析した455冊の書籍のうち、【青年期教育論】として分類できるものは、3冊のみであった。

第二に、明治期における青年教育論の大半は、「学生」を対象としたものであるという点である。とはいえ、【精神修養論】、【苦学・独学論】、【経済的成功論】などをみると、徐々に「青年学生」という用語が使用されなくなってくる。これは、「青年学生」と「地方青年」の区別が薄れてきたことを示しているといえる。

第三に、明治期における「青年」に関連する書籍の出版は、社会的背景に大きく左右されてきたという点である。殊更、日露戦後の「地方青年」を対象とした書籍の出版の増加は、政府の政策と連動して起こった現象である。

第四に、日露戦後の「地方青年」教育への取り組みは、政府が理想とする地方改良運動の「担い手」の育成という側面はあったにせよ、実際の教育内容を分析していくと、必ずしも国策が反映されたものばかりではない。むしろ、そうした社会的背景が、それまで等閑に付されてきた「地

方青年」の教育に着手する契機を創出したといえる。

最後に、【青年組織論】を詳細に分析していくと、実際に「地方青年」と関わり、彼らの教育を真剣に考えていた者と、国策の代弁者となり「青年団」について論じた者との違いがくっきりと浮かび上がってきた。

今後は、本稿の分析結果をもとに、先に示した山本瀧之助の主張がどのような意味で、同時代において注目値する独自性を有していたかという点を究明していくことを課題とする。

【注】

- 1) 近代デジタルライブラリーでは、書名だけでなく目次まで検索できるようになっているため、目次に「青年」をいう用語が含まれるものも分析対象とした。
- 2) 小川利夫、寺崎昌男監修『近代日本青年期教育叢書』（第1期—第7期）日本図書センター、1990年—1993年。ちなみに、本叢書には、解説書がなく、分類の定義や選書の根拠が示されていない。そのため、各項目の定義づけは、独自に行ったものである。
- 3) 松本孝次郎『応用心理学』早稲田大学出版部、1800年。
- 4) 同上書、7頁。本稿では、固有名詞以外は、旧字を新字に変換した。
- 5) 吉田正太郎編『民権官権政党盟約全書』秩山堂、1882年。
- 6) 陸軍士官学校編『卒業青年士官訓戒』陸軍士官学校、1883年。
- 7) 徳富猪一郎『新日本之青年』集成社、1887年。
- 8) 同上書、27頁。
- 9) 同上書、32頁。
- 10) 同上書、247—247頁。
- 11) 山本長太郎編『新日本政治社会之言論』興民社、1887年。鈴木力『護国之鉄壁』博文堂、1888年。安西権五郎『立志之骨髄：新日本青年』文明堂、1888年。山根銀之助『千城逸士意見書：一名・らいじんぐさん（旭）』1888年。依田繁太『東方新世界』1889年他。
- 12) 木村直恵『＜青年＞の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社、1998年、8—10頁参照。
- 13) 【 】は、独自に分類した項目を示すものである。
- 14) 佐竹智子「明治期における青年団の生成と展開」広島大学大学院教育学研究科編『広島大学大学院教育学研究科紀要』第60号、2011年、84頁から抜粋。図2は、明治1910年、翌11年に文部省により選出された136の優良青年団を分析し、「青年団」の設立時期を表したものである。ちなみに「前身からの移行」とは、「夜学会」や「若連中」などの組織から「青年団」へ移行した時期を示している。

- 15) 内務省『地方経営小鑑』, 1910年。
- 16) 浜中仁三郎編『地方自治青年団体模範事績』大日本護国会, 1910年。
- 17) 松尾幸三郎『模範青年団の組織及び設備』開発社, 1911年。
- 18) 由井正臣『軍部と民衆一日清戦争から満州事変期まで』岩波書店, 2009年, 39頁。
- 19) 石田雄『近代日本政治構造の研究』未来社, 1956年。
- 20) 不破和彦『「地方改良運動」と「町村是調査」—明治末期の内容官僚による『模範町村』創出をめぐって』『東北大学教育学部研究年報第27集』1979年, 80頁。
- 21) 佐々木豊「地方改良運動と町村是調査」神谷慶治監修『地方改良運動史資料集成』第一巻, 柏書房, 1986年, 44頁。
- 22) ここでは、「学生」とは旧制中学卒業以上のものを指すものとして定義した。また、「書生」も含む。
- 23) 徳富猪一郎, 前掲。
- 24) 新渡戸稲造『修養』実業之日本社, 1911年。
- 25) 同上書, 3頁。
- 26) 同上書, 26頁。
- 27) 同上書, 35頁。
- 28) 同上書, 40頁。
- 29) 鈴木力(天眼子)『活青年』博文堂, 1891年。
- 30) 同上書, 自序。
- 31) 同上書, 39頁。
- 32) 同上書, 24頁。
- 33) 志賀光雄『成効と体質』開発社, 1907年。石川貞吉『如何にして最良最大の精神作業を為し得るか』同文館, 1911年。金杉英五郎『脳力と勉強』広文堂, 1912年。
- 34) 徳富蘇峰「教育界の時事」『国民之友』29号, 1889年9月号。
- 35) ロベルト・ゼームス・メン『青年健康学』学農社, 1895年。
- 36) 竹内洋『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望』世界思想社, 2005年, 97-98頁参照。
- 37) 本荘一『処世の新研究青年活学』二松堂, 1912年。
- 38) 伊藤銀月『現代青年論』京華堂, 1907年。
- 39) 雨宮信順『青年學術軌範』開成堂, 1886年。
- 40) 鳥貫兵太夫『忍耐の秘訣』東北学院労働会, 1892年。桜井一義『逆境者と楽天主義』磊々堂, 1901年。永田岳淵『苦学力行の人』富田文陽堂, 1910年。他。
- 41) 大内徳亮『独立自活法: 青年学生』内外出版協会, 1901年。
- 42) 同上書, 3頁。
- 43) 同上書, 2頁。
- 44) 豊原史雄『學術技芸速成之新書』秋田屋, 1890年。蛭雪学人『学問之誘導: 青年子弟』金桜堂, 1894年。野田織衛『研学の順序』文学同志会, 1900年他。
- 45) 澤柳政太郎『学修法』同文館, 1908年。
- 46) 同上書, 47頁。
- 47) 波多野鳥峰『向上的青年』実業之日本社, 1907年。
- 48) 同上書, 4頁。
- 49) 福沢桃介『富の成功』東亜堂書房, 1911年。
- 50) 広原新『改正官立公立及ビ私立諸学校規則集』, 1895年。
- 51) 師範学校, 高等師範学校, 女学校, 全国各高等学校, 陸軍・海軍大学校等も含む。
- 52) 吉村大次郎『青年の渡米』中庸堂, 1902年。
- 53) 藤本西洲, 秋広秋郊『海外苦学案内』博報堂, 1904年。
- 54) 山本瀧之助『田舎青年』, 1869年。
- 55) 佐竹智子「山本瀧之助における初期青年教育論—『田舎青年』を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究ジャーナル』, 第7号, 2010年, 31-39頁参照。
- 56) 新聞『日本』日本新聞社, 1896年6月15日付。
- 57) ここでは、「地方青年」を「進学・留学希望者」以外の地方に存在する労働青年と定義した。
- 58) 井上雅夫『二宮尊徳翁と現代社会』文友堂, 1909年。
- 59) 並松信久「報徳思想の展開と結社運動」『農林業問題研究』第20号, 1984, 31頁
- 60) 児玉幸多編『日本の名著 26 二宮尊徳』中央公論新社, 1970年参照。
- 61) 佐々木豊, 前掲, 44頁。
- 62) 多仁照廣「< 解題 > 青年団体の恩人 山本瀧之助」『青年団活動史山本瀧之助日記 第二巻』日本青年館, 1986年, 350頁。
- 63) 佐藤蔵太郎『大分現状秋夜之感慨』, 1889年。
- 64) 大谷暉男『石見青年論』, 1895年。
- 65) 木村知治『経済教育: 実地経験』, 1889年。
- 66) 同上書, 61-63頁。
- 67) 村田宇一郎『学校中心自治民育要義』宝文館, 1910年。
- 68) 多仁照廣, 前掲, 355頁。
- 69) 山本瀧之助『地方青年団体』洛陽堂, 1909年。
- 70) 村田宇一郎, 前掲, 194頁。
- 71) 同上書, 2頁。
- 72) 前田宇治郎『地方青年の手引き』大成会, 1912年。
- 73) 同上書, 196頁。
- 74) 山本滝之助『地方青年団体』洛陽堂, 1910年。
- 75) 市川伝吉『自治と青年団体』大学館, 1910年。
- 76) 篠原祿次『地方青年団体の組織及事業』実業之日本社, 1911年。
- 77) 遠藤隆吉, 市川源三『男女青年之心理及教育: 附青年団体の指導』敬文館, 1910年。
- 78) 岡崎保吉『模範的地方青年団之指針』開発社, 1910年。
- 79) 河崎松葉『地方青年団体の指導』水野書店, 1910年。
(主任指導教員 坂越正樹)